



©Makoto Kamiya



©JUNICHIRO MATSUO

## 第210回定期演奏会「ロマン主義の拡張」

2025年4月27日(日) 13:45開場 14:30開演 [14:10～指揮者プレトーク]  
指揮/角田鋼亮(音楽監督) ヴァイオリン/周防亮介\*  
コルンゴルト: ヴァイオリン協奏曲ニ長調Op.35\*  
マーラー: 交響曲第1番ニ長調「巨人」

新世界・アメリカにまつわる人気曲たちをお楽しみいただいている本日……に続きまして、次回・第210回定期演奏会(4月27日)は新シーズンの幕あけ公演となります!

春から始まる2025年度の定期演奏会は、年間のタイトルに《ロマンティック・セントラル》と掲げられています。マエストロ角田いわく「人間の感情に訴えかけるような情感豊かな作品」を毎回お届けするプログラムになっていますが、有名な人気作はもちろん、聴く機会に恵まれないけれど、実は惚れ惚れするような良い作品!という「隠れた名作」も、折々あわせてお聴きいただけるのも楽しみなところ。

その先陣を切る次回定期は、最近演奏機会も増えて「再発見された傑作」というべき人気を誇る、コルンゴルトのヴァイオリン協奏曲(こぼれるような美しさ、とはこのこと!)に、マーラーの交響曲第1番(瑞々しい青春のシンフォニー!)という組み合わせ。ロマン主義の音楽をさらに先へ、大胆に拓いていった作曲家たちの〈情感の炸裂〉を、全身で体験してください。

### ◆〈ウィーン・ロマン派の最後の吐息〉コルンゴルトの魅力

次回定期には《ロマン主義の拡張》というタイトルが冠されていますが、テーマはさておき、演奏される2曲には、ほかにも幾つか共通点があります。どちらの作曲家もウィーンにご縁があって知り合い同士であること、そして、どちらも余計な愛称がついていること。

コンサート前半でお聴きいただくのは、〈ウィーン・ロマン派の最後の吐息〉と評された天才作曲家、エーリヒ・ヴォルフガング・コルンゴルト(1897～1957)が書いた、ヴァイオリン協奏曲ニ長調(1945年)です。

甘い美しさにあふれかえるようなこの傑作は、海外で〈ハリウッド協奏曲〉と呼ばれたりもしているそうで……というのも、全3楽章に出てくるメロディの数々は、もともとコルンゴルトがハリウッド映画のために書いた音楽から、引用されたものなのです。

といっても、コルンゴルトはアメリカ人ではなく、ウィーンで育った人。有力な音楽評論家だったお父さんが、かのモーツァルトにあやかって「ヴォルフガング」というミドルネームをつけたのですが、奇しくもコルンゴルトもまた「神童」として幼い頃から楽才を発揮します。物心つく頃には作曲を巧みにこなし、父と親しいウィーン宮廷歌劇場の音楽総監督だったマーラーも驚嘆させていたのです。

マエストロ角田が指揮した、第186回定期演奏会(2021年11月)で、コルンゴルトのバレエ音楽《雪だるま》序曲をお聴きいただいたこと、覚えていらっしゃる方も多いでしょう。あれは神童11歳(!)の作品でした。その後も10代にして既に成熟をみせたコルンゴルトは、今でも上演される名オペラ《死の都》(1920年)など名声を博します。

ところが、ナチス・ドイツの暴虐がヨーロッパを蝕み、コルンゴルトはアメリカへ亡命、ハリウッド映画の音楽を書いて過ごすことになりました。——彼としては、映画の仕事は不本意だったようですが、ハリウッドのほうは大歓迎。なにしろ、当代きっての大作曲家がヨーロッパから来てくれたわけですから、破格の好待遇でコルンゴルトを迎えました。

しかし、ふたたびコンサート用の純音楽で勝負を……と考えたコルンゴルトは、親しい名ヴァイオリニストの求めに応じて、このヴァイオリン協奏曲を作曲したのです。そのテーマの数々には、すでに発表された彼の映画音楽でも、とびきり美しいメロディを抜き出して生まれ変わらせた(それで〈ハリウッド協奏曲〉とも呼ばれたそうですが、ご本人としては不本意なあだ名です)。

### ◆夢見るような美しさ、豪華絢爛なサウンド——傑作!ヴァイオリン協奏曲

かくして、素晴らしい協奏曲が生まれました。うっとり夢見るように歌いこむヴァイオリン独奏はもちろん、オーケストラの響きも、ヴィブラフォン(鉄琴)やハープ、チェレスタなど、伝統的なヴァイオリン協奏曲では用いられなかったさまざまな特殊楽器も、夢見心地なサウンドを響かせているあたり、なるほど映画のサウンドトラックのように豪華絢爛……というより、現代のハリウッド映画音楽のサウンドは、コルンゴルトがご先祖のようなもので、順番が逆、なのです。

ところが、この「映画音楽的」な魅力があだとなりました。まさに「ハリウッド的」に聴こえてしまったがゆえに、初演直後から批判的な意見もあれこれ。20世紀を代表する名匠ハイフェッツが愛奏して作品の魅力が世に広めたものの、「時代遅れ」とみなされてしまったのです(コルンゴルトも、戦後のヨーロッパ音楽界に返り咲くことなく、失意のうちに亡くなります。その波乱の生涯については、早崎隆志『コルンゴルトとその時代「現代」に翻弄された天才作曲家』[みすず書房、1998年]という本をぜひ)。

しかし、時はめぐり……この曲の美しさは「再発見」されます。ハイフェッツが作曲家に「もつと難技巧を」と焚きつけたこともあって、ソロにはとんでもない超絶テクニックが要求されていますが、それが現代の名手たちの挑戦心をかきたてるのか、近年は素晴らしい録音も続々と登場、人気のレパートリーとなりつつあります。

次回定期では、内外で目覚ましい活躍をみせる俊英ヴァイオリニスト、周防亮介さんをご登場です。過去には、一晩で3つのヴァイオリン協奏曲を弾く、という凄いコンサートも開催されているほどの名手ですから、歌心と壮絶な技巧を極めて高度な領域で融け合わせたいこのコルンゴルト作品、きっと見事に聴かせてくれるでしょう！

## ◆青春の試行錯誤から——マーラー：交響曲第1番へ

さきほど、神童コルンゴルトのお話をしたところで、その才能に驚嘆した「ウィーン宮廷歌劇場の音楽総監督だったマーラー」をご紹介しましたが、今では作曲家として有名なグスタフ・マーラー（1860～1911）は生前、ヨーロッパを代表する大指揮者として活躍していました。

指揮活動が休みになる夏の休暇中は作曲に専念し、生涯に11もの大規模な交響曲を残しながら、多忙に追われた末、50歳という若さで病に倒れて亡くなってしまいます。もし生きながらえていたら、音楽史は大きく変わっていたに違いありません。

次回定期でお聴きいただくのは、そんなマーラーが青年時代に書いた、交響曲第1番です。若書きの作品とは思えない立派な出来映え……というより、いま聴くかたちになるまで、紆余曲折を経てずいぶん書き直されている作品ではありません。

——作曲家自身の指揮による初演（1889年ブダペスト）では〈2部から成る交響詩〉と称されていて、まだ〈交響曲〉ではありませんでした。数年後の再演（1893年ハンブルク、1894年ヴァイマル）ではさらに、聴き手の理解を助けるために、鬼才ジャン・パウル（1763～1825）の大長篇小説に基づく《巨人》というタイトルがつけられ、各楽章へのプログラムノートも準備されます。

つまり、ここまででは、5楽章から成る交響詩《巨人》だったわけですね。セントラル愛知交響楽団は、このオリジナル版にあたる珍しいヴァージョン——交響詩《巨人》〈ハンブルク稿〉を演奏したこともありますので（2014年6月、マエストロ寺岡清高指揮の第134回定期）、ご記憶のかたも多くいらっしゃいましょう。

## ◆『巨人』は忘れて受けとめたい——青春の息吹、自然の声、ほとぼしる歌

この作品が、次回定期でお聴きいただく、現在のかたちになったのは、1896年に4楽章の〈交響曲〉として再演されてから。ところが、このときマーラーは「要らぬ誤解を招く」という理由で、プログラムノートもろとも《巨人》というタイトルもぼつり削除します。

というわけで、この曲を聴くには、愛称《巨人》は忘れていただき、初期にどんな標題がつけられていたのか、知らずに聴いた方がよいとは思いますが……ご興味あるかたは、村井翔『作曲家◎人と作品 マーラー』[音楽之友社/2004年]をぜひ。

もちろん、ジャン・パウルの長編小説『巨人』も読まなくて大丈夫です。古見日嘉訳で刊行された邦訳[国書刊行会、1997年（新装版）]を手にとっていただくと、漬物石のような重さの大判書籍に細かい字が詰まった、本文750ページ近くの大長篇ぶりにまずたじろぎ、読み始めると、あまりの筋の錯綜ぶりにうろたえ（それが本作の凄いところでもあります）、マーラーの音楽を聴くには関係あるまい……と諦めもつこうかと思えます（しかし、この読書体験が人生を豊かにすることも間違いありません）。

さておき。この交響曲第1番には、まさに青春の息吹というべき清新さ、鮮やかなインパクトにも豊かな歌謡性が満ちあふれています（その点で、コルンゴルトの協奏曲とも繋がりますね）。しかも、曲にたたえられた〈自然の響き〉の美しいこと！

たとえば冒頭。澄んだ高いA音（ラ）の響きが、神秘的なフラジオレット（弦楽器の特殊奏法）で長く薄く奏されて始まるのですが……薄い光の層が堆積するかのような繊細さ、耳を暁の冷たい大気にまかせているような響きの中から、聴こえてくる鳥の声（木管楽器）、遠い宿営ラッパ……。自然の音たちがカラーージュされてゆく異例の開始は、初演当時の聴衆にはかなり前衛的に聴こえたいのですが、今の私たちには、なんとも清冽に響きます。

フィナーレの凄まじい昂揚——全オーケストラのエネルギッシュな咆哮がホールを満ちし、ロマンの先へ巨大な扉を開け放つその瞬間まで、青年作曲家の覇気がはちきれんばかりに満ちた傑作。これはぜひ、生演奏で体感していただきたいと思います。次回もこのホールでお会いいたしましょう！

### やまの たけひろ 山野雄大

ライター [音楽・舞踊評論]。『音楽の友』『レコード芸術 ONLINE』『バンドジャーナル』など雑誌・新聞への寄稿をはじめ、NHK・FM「オペラ・ファンタステイカ」他ラジオ出演も。第一生命ホールでのコンサートシリーズ《雄大と行く 昼の音楽さんぽ》ナビゲーターを務めたほか、CD解説、オーケストラやバレエ公演の解説、歌詞対訳など多数。朝日カルチャーセンター新宿教室で音楽講座を開講中。

Profile

